

# 日本音声学会 (Phonetic Society of Japan) 大会発表原稿作成の手引

玉田 誠・芳賀 紀行 (山葉大学大学院) Max Biaggi (Suzuki UNIV.)  
{tamada, haga}@yamaha.ac.jp, biaggi@suzuki.edu

## 1 はじめに

これは、2023 年度日本音声学会大会発表用の原稿作成方法を記したものです。これに従って原稿を作成して下さい。また、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のスタイルファイル使用例も兼ねています。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X で原稿を作成する方は、是非ご利用下さい。

## 2 論文作成上の注意

### 2.1 一般的注意

原稿には、今回発表する内容とその資料を詳しく記述してください。

### 2.2 注意事項

- 頂いた原稿はそのまま印刷に回しますので、コピーではなく photo ready の原稿をお送りください。
- 図表などは明瞭に描いてください。また、図、表、写真等を貼る場合は、はがれないようにしっかりと貼って下さい。
- 原稿は A4 版ですが、縮小印刷で B5 版になります。
- A4 サイズの用紙に横書きで、ワープロソフト等を使って作成して下さい。
- 1 行 35 字程度、1 ページ 40 行程度、6 ページ以内で作成して下さい (図表を含む)。
- マージン: 天 30mm, 地 35mm, 左右 30mm (必ずお守りください。これより外れると印刷されない可能性がありますのでご注意ください。)
- タイトル、氏名・所属、の間は 1 行あけ、氏名・所属の下も 1 行あけて下さい。著者の所属は括弧付きで書いて下さい。

所属の後に発表者の連絡先 (住所や E-mail address 等) を記載しても結構です。所属先は、  
大学・学部 / 大学大学院・系研究科等とし役職、課程名や詳しい専攻名等は省略して  
ください (非常勤の場合にも同様に役職名は書かなくて結構です)。

- ページは鉛筆で右下端に記入のこと。後で、通し番号をふります。

### 2.3 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 版固有の注意

- T<sub>E</sub>XLive 2023 の pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X, pBibT<sub>E</sub>X, dvipdfm によるコンパイルを検証しています。
- 英語のみのファイルをコンパイルする際には別途英文用のスタイルファイルを用意してありますので、そちらをご利用下さい。
- 参考文献の引用形式を「著者 (発表年)」等の形式にするのには、natbib.sty が必要です。最近の tetex ベースのパッケージには同梱されているとは思いますが、自分の環境にインストールされていない場合には、インストールしておいて下さい。
- natbib.sty を用いると、「\cite{label}」で、「小松 (1981)」や「Ladd (1984)」のように出力します。また、「\citep{label}」で「(大野・久野・杉村・久野, 2000)」のように出力します。
- 著者 (発表年) 形式で引用する場合には、bibliographystyle には付属の psjcite.bst を指定した上、スタイルファイルに natbib.sty および psjcite.sty を組み込んで下さい。

表 1: 表のサンプル

	得点 (平均)	反応時間 (秒)
グループ A	128.002	1.005
グループ B	98.320	1.224
グループ C	-137.204	1.337

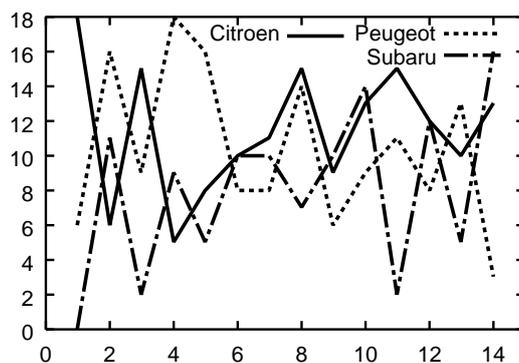


図 1: 図のサンプル

### 3 実例

日本音声学会は1926（大正15）年に、「音聲學協會」として創立された。創立10周年の1935（昭和10）年に「日本音聲學協會」、さらに創立25周年を目前にした1949（昭和24）年に「日本音聲學會（日本音声学会）」、英名 The Phonetic Society of Japan」と改められ、現在に至る。

### 4 結論

「音聲學協會」創立当時の趣旨は「本会ハ広く日本語及ビ日本領土内ノ言語ノ音声ヲ研究スルコトヲ目的トスル。」（会則第1条）であった。現在の学会趣旨は「諸言語の音声に関する研究を促進し、併せて会員相互の連絡提携を図ることを目的とする」（会則第2条）である。

### 参考文献

- 小松 英雄 (1981) 『日本語の音韻』 東京: 中央公論社.
- Ladd, R. D. (1984) "English compound stress." In D. Gibbon & H. Richter (Eds.), *Intonation, accent and rhythm*. (pp. 253–266). Berlin: de Gruyeter.
- 大野 眞男・久野 眞・杉村 孝夫・久野 マリ子 (2000) 「南琉球方言の中舌母音の音声実質」 『音声研究』 4: 1, 28–35.